

広がるANDPADの活用領域

建設通信新聞

第2部

発行所 白千建設通信新聞株式会社
〒112-0044 東京都千代田区神田神保町3-13-7
電話 03-3259-6711

ANDPAD ONE CONFERENCE 2021の開催に当たり、稲田武夫代表は「皆様とともに学び、2022年のANDPADの成長とサービス提供につなげたい」とメッセージを送った

ANDPADの2022年の方針

- 社員数 500 → 700 人体制へ
- 現場の皆様へ操作説明予定 8万人へ
- 年間事業投資60億円以上。異次元のプロダクト開発投資
- 専門業種に理解あるITパートナー 長期的信頼に値する体制
- 経営者・導入担当様と並走 職人・現場の方をITポジティブへ
- 高いテクノロジー実装力と現場への実装力を共存

アンドパッド(東京都千代田区、稲田武夫代表取締役)が開発、提供するクラウド型建設プロジェクト管理サービス「ANDPAD」が、2021年度に33万ユーザーを超え、住宅からビルディングへと活用領域を広げている。導入企業も設計事務所、ゼネコン、専門工事、職人へと急速に拡大し、ANDPADをプラットフォームに多様なデータを統合管理するため、BIMやIoTなど最新テクノロジーを駆使した機能開発を加速させている。11月9、10日には、ビルディング領域を対象にした「ANDPAD ONE CONFERENCE 2021」を初開催し、リーディングプレーヤーの取り組みと、ビルディング分野に役立つANDPADの最新機能を紹介した。各セッションを紹介し、建設DXの現在地と今後の展望を語る。



2021年度、ANDPADの契約企業は3800社を超えた。ゼネコン、サブコン、メーカーなど、現場や管理部門、職人さんを含んで、建設DXに取り組む企業が増えている。契約企業に招待されてANDPADを利用する企業は約13社になり、職人さんを含めた利用者は約33万人になりました。導入プロジェクト数は、国内で提供される施工管理アプリでは最も多い約680万件になります。21年は約4400回の説明会を開催し、6万3000人を超える職人の皆様にANDPADの機能を説明させていただきました。建設DXを支えるリーディングプレーヤーを目指して取り組みを進めています。

当社は15年に住宅領域の施工管理アプリをスタートして以降、導入企業が拡大し、現在は建設業界の働き方改革の背景に、ゼネコン、専門工事、設計事務所へと活用領域が広がっています。21年度の新規導入案件に限ると60%以上が非住宅分野となり、商業建築や専門工事の分野では当社をDXパートナーと認識いただく機会が増えました。例えば、現場で撮影する写真は住宅分野を含めて1日約25万枚となり、このうち4割以上が商業建築の分野となります。

当社は、22年度に向けて3つの大方針を掲げています。1つ目が社員数500人から700人の増加、2つ目が8万人以上への操作説明会の開催、3つ目が60億円以上の開発投資となります。

1つ目は、3800社のお客様に、より気持ちよく対応するため、社員を増やします。当社の社員の20%は建設業

アンドパッドの2021年と次の1年ービルディング領域で評価され始めたANDPADー

建設業界のDXを支えるリーダーカンパニーを目指して

界からジョインした人たちが、現場の理解者とITエンジニアが垣根を越えて融合し、新たなアイデアや発想を生み出す企業カルチャーを醸成しています。さらに社員を増やし、各専門業種に理解のあるITパートナーを目指したいと思っています。また「ANDPAD ZERO」という新規事業研究開発組織も立ち上げました。1級建築士や1級施工管理技士、BIMのスペシャリスト、元行政のメンバーなどのエキスパートが集結し、建築会社とともに、BIM、データ解析、IoTをキーワードにした新技術の研究開発に向けてPOC(技術検証)を実行しています。

2つ目として、説明会の開催は、われわれが最も大切にしていることです。建設現場のDXはプロダクトだけで進めるのは難しいため、22年度は年間8万人を超える人を対象に、質と量にこだわった操作説明会を開催したいと考えております。また現場で実際にANDPADを利用するのは多くの職人さんであり、さまざまな疑問に答えるため、アプリから直接電話発信する機能を備えています。ユーザーサポートチームがログインやパスワード変更なども含めて丁寧に回答し、21年度は4.6万人に対応しています。導入企業の経営者や社員の皆様、社外パートナーである職人の皆様に「ITポジティブ」にする活動を展開したいと思っています。

3つ目の開発投資では、建設会社が直面するDXの矛盾に着目します。建設業はさまざまな業種があり、設計、元請は、専門工事などそれぞれ業務が異なるがゆえにツールが多様化しています。各事業部が別々のツールを導入することで社内システムがバラバラになり、新たな業務が増える矛盾に各担当者は向き合っています。

そのため、これからの開発では、できるだけワンプラットフォームでデータを管理するALL in ONE機能、さまざまなツールが連動するオープンな連携機能、経営DXを前提にした現場DXの3つが重要になります。

ANDPADはアプリをできるだけ1つにまとめるため、写真、図面、工程表、チャットなどのツールをオンライン上で提供するとともに、データストレージや会計ソフト、電子契約、遠隔現場など外部の専門ツールとデータ連携してさらなる効率化を図ります。

そして、ペーパーワークがデジタルに置き換わっただけでは、経営指標には何もインパクトがありません。現場の業務をデジタル化(自動化)することで、現場から出てくるデータを活用し、いかに経営DXを進めるかが一番のポイントです。顧客をデジタル化した後、タブレットで進捗状況を見える化することで、経営DXが進むようユーザーの皆様とともに取り組みたいです。

当社のミッションは「幸せを築く人を、幸せに。」です。建設業界で働くすべての人たちにソフトを開発するからこそ、われわれ自身も楽しく仕事に取り組んでいるのだと思います。現場で働くすべての方にANDPADのIDを持っていただくことを目標に、これから先も生産性向上にコミットすることを約束します。



株式会社アンドパッド

代表取締役

稲田 武夫

CONTENTS

■2、3面

建設DXの最前線

建設現場の圧倒的な生産性向上を実現するため、建設DXが加速している。3次元技術を駆使した都市のデジタルツイン、BIM、XR、IoTなどのデジタル技術の活用や、ドローン、木造建築、BIM人材の育成など、建設業界の各分野のDXをけん引するリーディングプレーヤーのスペシャルセッションを紹介する。各分野における最新の取り組みを通じて、建設DXの今後を展望する。



■4、5面

ANDPADフロントランナーの取り組み

ビルディング領域では、現場から生成するデジタルデータのプラットフォームとしてANDPADを活用し、建設DXを実践する事例が増えている。現場経費のコストダウンや業務時間短縮などの生産性向上の実現にとどまらず、現場のデータを活用して経営上の課題の改善まで踏み込む「経営DX」への発展的な活用への期待も大きくなっている。ANDPADのフロントランナー企業による最新事例を紹介する。



■6面

ANDPADの最前線

図面、写真、工程表、チャット、黒板など、建築現場のDXに必要なツールをオンライン上で備えるANDPAD。クラウド型データ統合プラットフォームとして進化するため、最新テクノロジーを駆使してベーシック機能とオプション機能のブラッシュアップを進めるとともに、外部の専門特化型ツールとのデータ連携を本格化している。ビルディング分野へと拡張するANDPADの最前線のプロダクトを紹介する。



MEP設計の最前線とこれから—実空間とつながる、デジタルツインによる維持管理アプローチ—

AIやIoTなど新しいデジタル技術が... 建築家との協働も含め幅広いプロジェクトに携わっています。

Arup(アラップ)は英国を発祥とし、世界33カ国に88オフィスを置くエンジニアリング・コンサルティング企業です。

Arup



シニア環境設備エンジニア 向井一将氏

リアルタイムデータと連動

リアルタイムデータと連動... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。



このデータやグラフを表示して管理... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

のために開発したシステムです。... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

現場XR活用の最前線とこれから—図面/BIMを現場でオーバーレイすることで実現できる価値—

現場XR活用の最前線... 最新のXR技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

現場XR活用の最前線... 最新のXR技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

現場XR活用の最前線... 最新のXR技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。



事業開発部長 執行役員 池田昌隆氏

建設工事全体の最適化推進

建設工事全体の最適化推進... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

建設工事全体の最適化推進... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

建設工事全体の最適化推進... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

空調設備設計—製造の最前線とこれから—BIM起点で達成する、設計と製造の一元化—

空調設備設計—製造の最前線... 最新のBIM技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

空調設備設計—製造の最前線... 最新のBIM技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

空調設備設計—製造の最前線... 最新のBIM技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。



執行役員 東日本営業部長 前村秀明氏

建設ドローンの最前線とこれから—狭くて暗い場所で活躍する、屋内専用ドローン—

建設ドローンの最前線... 最新のドローン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

建設ドローンの最前線... 最新のドローン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

建設ドローンの最前線... 最新のドローン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

LiberaWare



代表取締役 関弘圭氏

狭小空間のデジタル化推進

狭小空間のデジタル化推進... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。



狭小空間のデジタル化推進... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

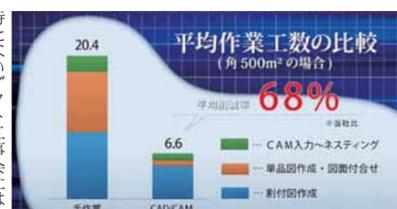
狭小空間のデジタル化推進... 最新のデジタルツイン技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

Revit MEPのアドインを開発

Revit MEPのアドインを開発... 最新のRevit MEP技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

Revit MEPのアドインを開発... 最新のRevit MEP技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

Revit MEPのアドインを開発... 最新のRevit MEP技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。



設備BIMの最前線とこれから—製造、施工で真価を発揮する設備BIMの可能性—

設備BIMの最前線... 最新の設備BIM技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

設備BIMの最前線... 最新の設備BIM技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

設備BIMの最前線... 最新の設備BIM技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。



取締役 開発部長 小倉哲哉氏

ビルディング・カンファレンス総括—入居氏が展望する、2022年以降の建設DX—

ビルディング・カンファレンス総括... 最新のビルディング技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

ビルディング・カンファレンス総括... 最新のビルディング技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

ビルディング・カンファレンス総括... 最新のビルディング技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

建設ITワールド



建設ITジャーナリスト 家人龍太氏

建設DXで生産性2-3倍の実現へ

建設DXで生産性2-3倍の実現へ... 最新の建設DX技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。



建設DXで生産性2-3倍の実現へ... 最新の建設DX技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

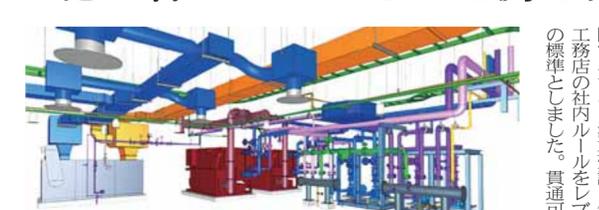
建設DXで生産性2-3倍の実現へ... 最新の建設DX技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

施工管理アプリとの連携も強化

施工管理アプリとの連携も強化... 最新の施工管理アプリ技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

施工管理アプリとの連携も強化... 最新の施工管理アプリ技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。

施工管理アプリとの連携も強化... 最新の施工管理アプリ技術を活用し、現場とリアルタイムで連動しています。



非住宅領域へ広がるANDPAD

建設業界のプライマリーCDEを目指す

建設DX(デジタルトランスフォーメーション)が急速な進化を遂げる中、次のステップを目指す鍵になるのが、建設プロジェクト全体におけるデータ管理の標準的方法や、手順を示すCDE(共通データ環境)の構築だ。建設DXを旗印に図面、写真、工程の管理、BIMなどさまざまなツールやサービスが続々と登場する中、ゼネコン、設計者、協力会社、発注者は個別に生産性向上の最適解を探っており、それぞれのワークフローを円滑化するCDEの重要性が高まっている。

アンドパッド執行役員の今井亮介氏は「さまざまなステークホルダーが建設DXを進める中、企業間、組織間の業務情報の共有、情報の粒度などを制限した共有を通じ、複数のプロダクトを快適に使えるようにすることが新たな課題になっています。

例えば図面は設計者が作成し、上司や施工主との共有、承認を得て公開され、アーカイブされていきますが、そうしたワークフローを提供する環境がCDEです」と説明する。

CDEはISOに定義されており、国内プロジェクトでも導入が進みつつある。さらにCDEが他のCDEやBIM、IoTデバイスとつながって運用するインターオペラビリティ(IO)という概念も登場している。

アンドパッドは、CDEやIOを実現するため、コラボレーションワークフローアライアンス—の3つのコンセプトを挙げています。

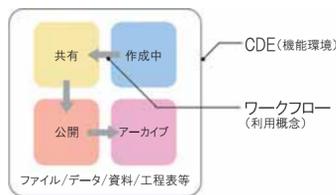


今井氏

それらを体現するため、アプリマーケットなど新機能の開発を日々進めている。

ANDPADは、写真や資料管理、チャットや報告、工程表などのベーシック機能と、電子小黒板やボードなどのオプション機能、アプリマーケットを通じて連携する外部アプリとの一元的な利用を実現し、顧客の生産性向上を支援する。

今井氏は「建設業界のプライマリーCDEを目指し、ユーザーのニーズに応えながら機能をスパイラルアップしていきたい」と意気込む。



建設DX(デジタルトランスフォーメーション)の推進を強力にサポートするANDPADは、契約企業数が380社を超え、2022年度の利用企業数が13万社、ユーザー数が33万人となり、従来の住宅領域にとどまらず、ビルディングなどの非住宅領域の生産性向上に役立つツールやサービスの開発を加速している。ここでは、設計者、元請け、協力会社、職人など非住宅領域のプロシエクト関係者の生産性向上や働き方改革に役立つ最新のソフトウェアを紹介する。



ANDPAD黒板

ANDPAD黒板は、電子小黒板を活用した工事写真の撮影と台帳管理をシンプルに行い、業務効率化を図るツールだ。電子小黒板テンプレートの作成、黒板付写真の撮影、写真の自動整理、台帳作成の一連の業務にワンストップで対応する。スマートフォンやタブレット端末が1台あれば工事写真に関する業務が完了し、圧倒的な生産性向上を実現する。

従来の工事写真の撮影は、現場内で大きな黒板を持ち歩き、撮影のたびに何度も書き直さなければならず、雨が降るとチョークが消えるなど多くの手間が発生していた。また黒板の持ち手と映し手に分かれるため、複数人での対応をよまなくされていた。撮影した大量の写真の整理も膨大な時間がかかり、台帳を作成する負担も大きかった。

こうした業務を改善するため、ANDPAD黒板を開発した。撮影で使用するのはスマートフォンやタブレットだけで、黒板を撮影する

ANDPAD施工管理

ANDPADは、写真・資料、チャット・報告、工程表など、施工管理のDX(デジタルトランスフォーメーション)に必要なベーシック機能を標準装備し、導入する現場がビルディング領域へと普及に広がっている。それぞれのツールで得られる現場のデータをクラウド上で一元管理し、関係者間の情報共有や生産性向上を図りながら建設DXを推進する。

写真・資料の管理では、データの保存場所をクラウド上に一元化して管理することで、何れもメールにデータを添付して送ったり、資料をスキャンしてアクセスする手間を削減するなどスマートな管理を可能にする。現場事務所や先どこにもANDPADを開けば最新データを閲覧できるため、遠隔からの現場管理も容易になる。

チャット機能は、報告機能は、これまで、の電話、メール、ファクスによる、情報伝達手段の代わり、にチャットを利用して関係者全員に情報を一括送信するなどの、リアルタイム

自動整理機能で時間短縮

撮影した写真や資料は、自動的に整理され、黒板ごとに自動的に分類、整理されるほか、現場のメンバー全員が閲覧でき、いつでも誰が撮影したのかを示すデータ履歴を正確に残せる。

撮影した写真や資料は、黒板ごとに自動的に分類、整理されるほか、現場のメンバー全員が閲覧でき、いつでも誰が撮影したのかを示すデータ履歴を正確に残せる。

また、ANDPAD黒板は、iOSとAndroidで動作するスマートフォンやタブレット端末で使用できるため、新たなデバイスを導入する必要がないことから導入コストも抑えられる。

電子小黒板機能は、国土交通省の最新術情報提供システム(NETIS)に登録されているほか、施工管理ソフトウェア(アサヒ建設)が提供する信頼性確認(改ざん検知機能)検定に合格し、公共工事の現場でもメリットを発揮する。

オールインワンでハイクオリティ機能

この情報共有に貢献する。作業日報やKY活動など業務に関与した報告書のテンプレートも作成し、協力会社が現場で撮影した写真とともに報告書を提出する。元請けとの情報共有を迅速化する。ANDPADで工程表も作成し、クラウド上で管理する。現場の各担当者は、クラウドにアクセスすれば最新の工程表を確認できるため、メールの送り忘れといった情報共有のミス防止につながる。

これらのベーシック機能に加え、検査、図面、電子小黒板、ANDPADボードなどのオプション機能があり、必要な機能を選択して活用し、オールインワンの施工管理を可能にする。例えば検査機能は、スマートフォンで検査項目を確認し、チェックリストに沿って作業を行い、写真と報告書をPDFで出力し、送信できる。管理画面に実施予定箇所と実施済みの状況が可視化されるため、抜け漏れ防止に役立つ。

図面機能は、タブレット端末から図面や資料のPDFに指図事項を書き込むことができる。書き込んだ資料はANDPAD上に保存され、アプリを通して関係者がリアルタイムに情報共有する。これらの機能が業務に定着するよう、サポート体制の充実も力を入れている。

導入企業や協力会社向けの説明会を随時開催しているほか、ユーザーの問い合わせに迅速丁寧に対応するANDPADカスタマーサポートを整備している。導入企業の負担を抑え、万全のサポート体制で、伴走し、現場の生産性向上を実現する。

ANDPADボード

職人稼働管理・差配システム「ANDPADボード」は、従来のホワイトボードやExcelによる、アナログな管理に代わり、クラウド上で協力会社や職人の日程調整や現場情報の共有、作業予定報告までをワンストップで行うサービスだ。移動中や遠隔地でもスマートフォンを利用してスケジュールの確認や編集を行う。稼働管理や工事発注を効率化する。稼働管理用のホワイトボード、Excelをクラウドで管理することで、毎朝メール、ファクス、紙、電話で共有していたホワイトボードやExcelの情報をANDPADボードにまとめる。手配担当者に属人化していた職人の稼働状況も可視化されるため、手配担当者同士がリアルタイムに稼働情報を共有できるようになり、スケジュール管理や工事発注も効率化する。

結果、施工外注費の削減に貢献することが期待される。出先で急な日程変更が発生してもスマートフォンからすぐにANDPADで確認、編集し、即座に

ANDPAD受発注

「ANDPAD受発注」は、建設業の受発注プロセスをオンライン化するツールとなる。工事原価などを見える化し、現場の実態を把握することで、経営改善に貢献することが期待できる。使いやすさ(こだわった操作性と徹底した導入サポート)、協力業者・職人ももちろん、普及ANDPADを使わない経理部門も簡単に利用可能だ。

ANDPADが7月15日〜8月18日の期間、インターネットを利用して行った建設業の受発注業務の実態調査による、発注方法の1位がファクス、2位が郵送、3位がメールとなった。発注書の回収方法は1位が郵送、2位がファクス、3位がメールとなり、ファクスや郵送などのアナログなやりとり割合が高くなる。業務の長時間化や属人化などの課題が浮き彫りとなっていた。受発注業務は社内外・部門間の連携が非常に複雑で、ファクスや郵送によるリアルタイムラグが起きやすいのが課題だ。また、口頭のやりとりによる認識のずれ、発注漏れや粉本などで確認が何度も必要になることや、ミスや手戻りの発生につながるという状況にある。ANDPAD受発注を導入することで、まずは、すべての業務をクラウド上で完結し、捺印、ファクス、郵送などの確認作業を不要にする。続いて発注・請求の確認作業として、現場監督、経理担当、協力会社・職人の間で発注・請負対応状況、請求で生じる確認のための工数を削減することが可能だ。

オンライン化のメリットは現場の業務改善にとどまらず、リアルタイムで工事原価を見える化することで、協力会社の工員、材料費、やり直し工事費、手持ち手戻りによる追加費用などの情報が確認できるようになり、利益の圧迫要因の分析や原価削減などの課題に取り組むなど経営改善に生かすことができる。

どこでもスマートフォンから確認・編集作業を行うことができたため、リモートでの管理も可能だ。クラウド保管で省スペース化や書類の検索も簡単にすることができ、帳票管理コストが軽減される。電子契約に必要な建設業法、電子署名法、電子帳簿保存法の要件を満たし、国土交通省のグリーン簿制度で適法性が確認されたシステムのため、法令順守に対応する負担も軽減される。

ANDPAD受発注を導入し、経理スタッフの業務量が10分の1になった事例や、施工管理と受発注管理のシステムを統一し、1物件当たりの受発注関連書類が8割削減した事例もあり、業務効率化に大きく貢献することが期待される。

協力会社の日程調整、情報共有をワンストップで

対応できる。カレンダー画面でマウスを上下左右に動かしたり、ドラッグ&ドロップして簡単に編集する。

一方で、職人の使い勝手も追求されている。スマートフォンのホーム画面に明日の予定や週間予定を表示し、ワンクリックで工事の空きや住所、段取りの詳細な情報を確認できるようになった。図面や資料などをANDPADボードに入れたことで協力会社と素早く情報共有し、事前に最適な施工方法や工具を準備することで品質の高い施工につながる。作業報告書をホーム画面から写真付きで作成し、そのまま送信できるため、アプリの操作だけで報告業務が完了する。

現場の住所を登録しておけば、ボタン1つで地図アプリを起動させ、現場に訪れる人に経路検索した地図情報を提供する機能も搭載した。

ANDPADボードのタイムラインは、工事情報や作業指示、写真、資料のやりとり、完了報告などの履歴がすべて保管され、会社の資産として利用できる。無料のチャットアプリでは探さなかった過去のやりとりした情報も簡単に検索可能だ。例えば事務職員が経理処理の際、監査と協力会社のやりとりを簡単に確認できる。

柔軟な権限設定機能も備え、管理者は、営業所など任意の組織単位でカレンダーの表示を切り替え、現場の稼働状況を確認する。社外の職人がスケジュールを管理する場合は、招待した条件のみに操作する権限を限定するなど、ユーザー一人ひとりの閲覧・編集権限を自由に設定できる。

工事原価をリアルタイムで見える化

「ANDPAD受発注」は、建設業の受発注プロセスをオンライン化するツールとなる。工事原価などを見える化し、現場の実態を把握することで、経営改善に貢献することが期待できる。使いやすさ(こだわった操作性と徹底した導入サポート)、協力業者・職人ももちろん、普及ANDPADを使わない経理部門も簡単に利用可能だ。

ANDPADが7月15日〜8月18日の期間、インターネットを利用して行った建設業の受発注業務の実態調査による、発注方法の1位がファクス、2位が郵送、3位がメールとなった。発注書の回収方法は1位が郵送、2位がファクス、3位がメールとなり、ファクスや郵送などのアナログなやりとり割合が高くなる。業務の長時間化や属人化などの課題が浮き彫りとなっていた。受発注業務は社内外・部門間の連携が非常に複雑で、ファクスや郵送によるリアルタイムラグが起きやすいのが課題だ。また、口頭のやりとりによる認識のずれ、発注漏れや粉本などで確認が何度も必要になることや、ミスや手戻りの発生につながるという状況にある。ANDPAD受発注を導入することで、まずは、すべての業務をクラウド上で完結し、捺印、ファクス、郵送などの確認作業を不要にする。続いて発注・請求の確認作業として、現場監督、経理担当、協力会社・職人の間で発注・請負対応状況、請求で生じる確認のための工数を削減することが可能だ。

オンライン化のメリットは現場の業務改善にとどまらず、リアルタイムで工事原価を見える化することで、協力会社の工員、材料費、やり直し工事費、手持ち手戻りによる追加費用などの情報が確認できるようになり、利益の圧迫要因の分析や原価削減などの課題に取り組むなど経営改善に生かすことができる。

どこでもスマートフォンから確認・編集作業を行うことができたため、リモートでの管理も可能だ。クラウド保管で省スペース化や書類の検索も簡単にすることができ、帳票管理コストが軽減される。電子契約に必要な建設業法、電子署名法、電子帳簿保存法の要件を満たし、国土交通省のグリーン簿制度で適法性が確認されたシステムのため、法令順守に対応する負担も軽減される。

ANDPAD受発注を導入し、経理スタッフの業務量が10分の1になった事例や、施工管理と受発注管理のシステムを統一し、1物件当たりの受発注関連書類が8割削減した事例もあり、業務効率化に大きく貢献することが期待される。

ANDPAD

デジタル化の観点で業務をチェック!

建設DX診断

あなたの会社の強みと改善点がわかります!

70点 15 17 6 20

5分で終了! 無料診断はこちら

業務特化型ツールと連携して課題解決

ANDPADアプリマーケット

「ANDPADアプリマーケット」は、外部の業務特化型ツールと、ANDPADを連携するプラットフォームとなる。建設プロジェクトの営業、企画設計、見積もり、契約、施工、コミュニケーション、経理・会計、文書管理、経営管理などの、業務フローをDXするANDPADのベーシック機能が、APIを通じて外部の専門ツールと連携し、さらなる利便性の向上を実現する。

これまでに「Salesforce」「Box」「クラウドサイン」「Safie(セーフィー)」「マネーフォワードクラウド会計」「勘定奉行クラウド」などの連携が完了しており、今後も連携先を拡大する方針だ。クラウド録画サービス「Safie(セーフィー)」との連携では、プロジェクトごとにカメラをひも付け、

ANDPAD上で、常時現場を遠隔で確認できるようにするとともに、必要な動画をピックアップしてANDPADのフォルダにワンクリックで保存する機能を開発した。

またBoxとANDPADで互いに管理するフォルダ間のファイル移動を可能にしている。全社のコミュニケーションをBoxで行っている場合は、ANDPADから協力会社にIDを配布すれば、ANDPAD経由でBoxに格納しているファイルを共有できる。

クラウド会計との連携では、ANDPAD引合粗利管理で作成したデータと連携する。例えば現場の積算担当者が、引合粗利管理機能で作成した売り上げや原価情報を、タイムレックにクラウド会計上で利用でき、経理担当者の二重入力を省き、正確な決算書を作成する。

電子契約では、クラウド契約サービス「クラウドサイン」と連携し、ANDPADで作成した契約書をクラウドサインに自動連携し、契約手続きを一元管理できる仕組みを構築した。

今後も、他のベンダーとのアライアンスを広げ、単一システムだけでは解決できない課題に対し、連携して取り組む仕組みを構築していく。